

房 総 きの こ 今 昔

吹春 公子

その1

●子供のころ（昭和25年から30年ごろ）、
菅田の小松林（若い松林）でハツタケを採った。ハツタケは「ほんぎ¹」とか「ろくしょう²」と呼んで、アカハツとは区別していた。アカハツは一級下のきのこで、呼び名はそのまま「あかはつ」であった。採れたハツタケは、収穫量によって調理された。多いときはご飯、少ないときは味噌汁にした。少ないときでもご飯にしたいときは、ナスと一緒に炊き込んだ。チチアワタケを「あぶくちゃっちゃ」と言った。「つちもぐり³」は地面にもぐっていてなかなか上に出てこない。どちらも味噌汁にして食べた。

●今の泉自然公園（千葉市若葉区野呂町）あたりのマツ・スギ林で「ちょっぼり⁴」というきのこを採った。おそらくアカヤマタケだったと思う。たくさん採れたので佃煮にして食べた。

●ショウロは九十九里のマツ林に行って採った。醤油で煮たり汁にしたりして食べた。
（千葉市緑区菅田在住、今井宜勝さんから聞き取り
2009年10月4日）

1 『ほんぎ』は、「ほんぎのこ＝ハツタケ」の略称と思われる。千葉県ではハツタケは珍重されるため、ハツタケ以外のきのこに対して「本当のきのこ」の意。

2 『ろくしょう』は、銅などの表面に生じる青緑色のさびのことで「緑青」と書く。ハツタケを傷つけた部分の乳液が、暗赤色から青緑色に変化する様からの呼称。

3 『つちもぐり』は、千葉県の方言でケンロハツをさす。「土潜り」。

4 『ちょっぼり』は、千葉県で野良仕事のときなどに用いられる編み笠「チョッポリ笠」からきていると思われる。北総地域ではボッチ笠、チョンポリ笠とも呼ばれるこの笠（写真）は、野田市や柏市、松戸市、市川市などの東葛地域から東京湾岸に沿ってはチョッポリ笠と呼ばれていることが多く、収録した緑区菅田に程近い市原市菊間でもチョッポリ笠の呼称を用いている。ボッチ、チョンポリともに突起の意味で、笠の上にある出っ張り、つまり編んだ草を頂点で束ねた部分を指している。アカヤマタケの中央部が突出している傘形がこの編み笠を連想させることからの呼称であろう。

その2

●子供の頃は市原に住んでいた。秋になると朝ハツタケを採りに父と近隣の小松林へ行った。ハツタケが採れないときは「ぢもぐり⁵」という白くて大きいお盆のようなきのこを採って味噌汁にした。味は辛かった。大きい松林には、アカハツが多かった。

●昭和46年から菅田に住み、自称“名人”のきのこ採り好きの夫に対抗して、季節になると毎月山へ出かけた。色々なきのこを知り、ハタケシメジ、アラゲキクラゲ、ヒラタケなどを沢山採った。

●夫と東浪見の海岸で「きんたけ⁶」狩りもした。これは見つけると“金”みたいに嬉しかった。初めはひたすらかじって（鎌や熊手などの道具で、落ちた松葉をひたすら掻い



イグサで編まれたボッチ笠(四街道市吉岡)

て) 探したが、慣れてくると地表には見えなくても生えているのがわかるので、じきにただ歩くだけのプラプラ獵法に変わった。きのこ狩りは勘どころが勝負である。

(千葉市緑区誉田在住、今井節子さんから聞き取り
2009年10月4日)

5『ちもぐり』は、「つちもぐり」と同じくケシロハツをさす。「地潜り」。

6『さんたけ』は、傘色が鮮黄色であることから「金茸」。ここでは海岸のシモコシをさすが、千葉県内陸部ではキシメジをさすこともある。シモコシ、キシメジともにいまの図鑑では毒となっているので注意を要する。金茸に対して銀茸もあり、千葉県の海岸ではハマシメジをさすが、内陸部ではシモフリシメジをさすこともある。詳しくは、会報16/17号：特集／千葉キノコ話②金茸と銀茸を参照。

参考文献：

- 千葉県の歴史 別編 民俗1 (1999)
- 房総の民俗(1963)
- 野田市民俗調査報告書(2006)
- 千葉県柏市民俗報告資料 (1980, 1981)
- きのこの語源・方言事典(1998)、ほか